

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03020

研究課題名(和文) 中世日本の異国使節に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on the foreign envoys in medieval Japan

研究代表者

関 周一 (Seki, Shuichi)

宮崎大学・教育学部・教授

研究者番号：30725940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中世日本の異国使節に関する基礎的な事実を明らかにすることである。異国使節に関する史料を収集して分析し、室町幕府や大名が、異国使節についてどのように対応したのを明らかにした。例えば、足利將軍の兵庫下向や異国使節との接見、異国使節の行列などを考察した。また民衆は、異国使節の行列に対して強い興味を示したことを指摘した。結論として、室町幕府や大名が、異国使節の接待を利用して、自身の権威を上昇しようとしたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世日本の朝鮮通信使は広く知られているが、それを上回る頻度で、異国使節が中世日本を訪れていたことは、一般にはほとんど知られていない。本研究は、中世日本の異国使節に関する基礎的な事実を明らかにし、彼らを受容することは、公権力にとって、その権威を荘厳する役割があったことを示した。中世の日本や国際交流に対する理解の一部を変更するものであると同時に、現代や未来の国際交流を考えるための指標となり得る。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the basic facts concerning the foreign envoys in medieval Japan. I have collected and analyzed historical materials on them, and clarified how the Muromachi Shogunate and the daimyo received to foreign envoys. For example, I have considered General Ashikaga's visit to Hyogo, interviews with the foreign envoys, and the processions of the foreign envoys. I also pointed out that the people showed a strong interest in the procession of foreign envoys. In conclusion, it was clarified that the Muromachi Shogunate and the daimyo tried to increase their authority by using the entertainment of foreign envoys.

研究分野：日本中世史

キーワード：異国使節 外交 足利將軍の兵庫下向 異国使節の行列 異国使節の引見 異国使節の宿所 異国使節の遊覧 室町幕府

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

近年、中世日本の対外関係史研究は急速に進展し、国家や地域権力による外交や、海商らによる貿易の実像などが、文献史料の精査によって明らかにされてきた。また物流については、日本列島各地における発掘調査が進展し、特に交流の窓口である博多や堺などの港町におけるモノの動きや消費の姿などが明らかにされてきた。

その一方、未だ十分に解明されていないテーマも数多く存在している。その一つが来日した異国使節、すなわち中国・朝鮮・琉球の使節である。14～15世紀は、異国使節が京都を訪れた時期であり、朝鮮使節は対馬や山口などを訪れている。

日本から中国や朝鮮などに派遣された使節のうち、特に遣明使(遣明船)については、近年、急速に研究が進展している。それに対し、異国使節に関する研究は、基礎的な史実の確認さえも未だ十分には行われていない。文献史料は、日本側史料および中国・朝鮮・琉球側史料とも比較的豊富であるにも拘わらず、従来の諸研究において分析対象となった使節には偏りがあり、その詳細が不明な使節は数多い。使節の滞在場所や移動ルートなどの現地比定が可能であるが、先行研究では現地調査が十分に行われていない。

2. 研究の目的

(1)14～15世紀を中心に、来日した異国使節(明使節、高麗・朝鮮使節、琉球使節)に関する、日本側史料や中国・朝鮮・琉球側の史料の所在を明らかにする。

(2)収集した文献史料から導き出させる情報を多角的に考察する。それらの情報は、使節を派遣した中国(明)・朝鮮(高麗・朝鮮王朝)・琉球の側からみたもの、使節に対応する日本側からみたものに大別できる。では、中国・朝鮮・琉球が日本に使節を派遣した目的、派遣にいたる国内事情や対外事情、使節の日本における行程、使節が観察した日本像などを明らかにしていく。については、室町幕府や大名たちによる使節に対する接待の仕組み、使節との交渉の内容などが明らかにしていく。特に、使節を迎えた際の儀礼、儀礼に使用されるモノ、使節とやりとりされる贈答品などが明確になる。

(3)異国使節が日本において行動した場所や移動ルートを明らかにし、行動した場を復元する。

(4)上記の作業を通じて、そのことによって、室町幕府(国家)や諸大名(地域権力)にとっての異国使節のもつ意義を考察する。

3. 研究の方法

(1)異国使節(明使節、高麗・朝鮮使節、琉球使節)に関する文献史料を収集する。日本側史料については、刊本から検索する他、重要な史料については東京大学史料編纂所などの機関が所蔵する原本または写真帳・影写本の調査を行う。中国・朝鮮・琉球側史料については、『明実録』や『朝鮮王朝実録』などの刊本史料(影印本または活字)の他、インターネットで公開された史料も検索する。

(2)異国使節が訪れた日本の各地について、現地調査を行い、彼らが行動した場所や移動ルートを比定する。使節の滞在地の博物館・埋蔵文化財センターなどを訪れ、遺物を実見し、考古資料について最新の情報を入手する。

4. 研究成果

異国使節に関する日本側史料を中心に収集し、可能な限り写真版との校合を行った。その上で、室町幕府や地域権力の異国使節への対応や、使節の日本における行動などを明らかにした。発表を予定している論文「室町幕府の異国使節への対応」を基に、室町幕府の将軍(足利将軍。公方。室町殿。義満は元将軍)が、異国使節に対してどのように対応したのかについて、主要な点を述べる。

(1)将軍(公方、室町殿)の兵庫下向

足利義満は、異国使節や、日本からの遣明使を出迎えたり、見送ったりするために兵庫に下向した。その初見は、応永8年(1401)の「高麗船」の見物であり、義満の妻・妾・娘、側近の僧侶、幕府の要人を同行している。その後も明使や遣明使が到着しないし出発する度に兵庫への下向を続け、側近の公家を同行させている。義持や義教も義満にならい、明使を迎えるため兵庫に下向した。兵庫下向は明使への礼を尽くすという意味があり、京都周辺の人々に対して明使の来日を宣伝する効果をもっていたと考えられる。

(2)異国使節の行列

入洛や引見場所への移動する際の異国使節の行列は、衆目の関心を集めた。僧俗男女を問わず、群衆が見物した。このことは将軍（公方、室町殿）の権威を、民衆に誇示する効果があったと考えられる。足利義満は、北山殿での明使の引見に際し、両側に武士が並ぶ八町柳を行列させ、側近の公家に北山殿惣門や四脚門で出迎えさせた。八町柳はなだらかな傾斜が続く通りで、直前まで門をみることはできない。

(3)異国使節の行程に関する情報

明船（明使）や遣明船（遣明使）などの行程（どの港に入ったのかなど）に関する情報が、九州探題らによって逐次幕府に報告された。それに基づき、室町殿の兵庫下向や、明使の入洛、明使の引見の日程が決められていた。このことは、足利義教の明使に対応した事例から詳しく知ることができる。地方と京都（幕府）との連絡体制が整備されていたことがわかる。

(4)異国使節の宿所

足利義詮は、洛中を避けて天龍寺雲居庵を高麗使の宿所にした。義満も洛中を避けて明使の宿所を法住寺に定めたが、その後、五条因幡通の武士宅をあてた例がある。義持は、尼寺であった深修庵を、朝鮮使の宿所にした。義教は、明使の宿所について、六条法華堂を仮の宿舎とし、その後、大宮猪熊道場に入らせた。義勝は、朝鮮使の宿所を、東山双林寺脇の景雲庵とした。

(5)将軍（公方、室町殿）が異国使節を引見する場所

足利義詮は、宿所である天龍寺に2度赴いた。義満は、北山第において引見した。義持は、当初は義満を継承して北山第を使用したが、その後は自身の御所を避けて、宝幢寺や等持寺（洛中）で引見した。義教は、最初は仁和寺等持院において通信使を引見したが、室町北小路邸に御所を移してからは、室町殿（室町第）を使用した。義勝の引見も室町殿（室町第）であった。義満や義教は、異国使節の引見を通じて自身の権威を誇示する意図が濃厚である。特に義教は、公家・武家を挙げて異国使節に対処し、幕府重臣や満済准后らに細かな指示を与えた。自身の権威を上昇させるために、異国使節を積極的に利用したといえる。

(6)引見の儀礼と芸能

引見にともない日本や明・朝鮮の芸能が催され、行列においても奏楽された。外交の一環として、芸能の競演が行われたといえる。将軍（公方、室町殿）は異国使節の芸能に深い興味を示し、足利義詮は、高麗使の宿所である天龍寺にまで赴いて芸能を見物した。義教も、明使の宿所である、六条坊門大宮長福寺の「唐人宿」を訪れ、明使の芸能を見物した。

も

(7)異国使節の遊覧

異国使節は、京都や奈良の寺社を遊覧している。幕府は、日本文化の水準の高さを使節に見せようとする意図があったと思われるが、使節自身も積極的に遊覧している。異国使節は、京都五山や比叡山延暦寺、奈良の大仏殿などを訪れている。明使が祇園会を見物した事例もある。

(8)地域権力の異国使節への対応

以上のような室町幕府の対応を参照したのか、地域権力にも共通した例をみることができる。九州探題渋川義俊は、朝鮮使を行列させ、多数の観衆を集めている。大内教弘は、拠点の山口から瀬戸内海の赤崎浦まで下向して、朝鮮使を出迎えている。島津氏は、琉球使の接待の際、犬追物を見物させている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 関周一	4. 巻 815
2. 論文標題 中世の国際交流から生まれた子どもたち	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関周一	4. 巻 36
2. 論文標題 東アジア海域交流のなかの中世山陰	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 貿易陶磁研究	6. 最初と最後の頁 100-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関周一	4. 巻 44
2. 論文標題 海域交流の担い手 倭人・倭寇	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 九州歴史科学	6. 最初と最後の頁 79-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 関周一
2. 発表標題 文献からみた南九州の対外交流
3. 学会等名 日本貿易陶磁研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関周一
2. 発表標題 14世紀 倭寇の韓半島 掠奪
3. 学会等名 (財)韓日文化交流基金(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関周一
2. 発表標題 中世韓日関係史研究の争点と史料
3. 学会等名 東北亜歴史財団(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 関周一
2. 発表標題 唐物研究の可能性 - 異分野との協業の試み -
3. 学会等名 九州史学会大会シンポジウム
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 大庭康時, 伊藤幸司, 関周一, 長田弘通, 中山圭, 柴田亮, 松尾秀昭, 鮎川和樹, 岩本康成, 栗林文夫	4. 発行年 2020年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 180 (18-37)
3. 書名 九州の中世1 島嶼と海の世界	

1. 著者名 関周一, 村井章介, 金文子, 荒木和憲, 関德基, 木村直也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 景仁文化社	5. 総ページ数 386 (13-75)
3. 書名 近世韓日関係の実像と虚像	

1. 著者名 木村茂光(編)、湯浅治久(編)、青柳周一、熱田順、飯村均、伊藤哲平、宇佐見隆之、大河内勇介、大村拓生、鎌倉佐保、菅野洋介、小山貴子、鈴木弘太、関周一、則竹雄一、林文理、原淳一郎、廣田浩治、藤本頼人、山崎雅稔	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 526 (323-355)
3. 書名 旅と移動 人流と物流の諸相	

1. 著者名 関周一(編著)、河内春人、澤本光弘、木村直也、松田利彦、太田修	4. 発行年 2017年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 412 (89-176)
3. 書名 日朝関係史	

1. 著者名 中島圭一(編)、高橋典幸、関周一、川本慎自、湯浅治久、七海雅人、落合義明、坂田聡、五味文彦、苅米一志、呉座勇一、黒田智、大藪海、石原比伊呂、高橋一樹、村木二郎、佐藤亜聖、森島康雄、古田土俊一	4. 発行年 2016年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 490 (31-57)
3. 書名 十四世紀の歴史学 - 新たな時代への起点 -	

[産業財産権]

[その他]

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----